

ハイパーテキストは新時代の物語表現における一つの様式である

プレブスレン・ヤンディー (Пүрэвсүрэн ЯНЬДИЙ / Purevsuren YANDII)
(モンゴル国立教育大学社会人文学部文学科専任講師)

ハイパーテキスト (гипертекст / hypertext) とはコンピュータ操作に関する概念である。それは複数のテキストを相互に関連づける可能性をもたらすシステムであり、ユーザーが順序不同に関連づけられたテキストを経由して情報を獲得する可能性をもたらしている。ハイパーテキストという概念は、アメリカの哲学者にして社会学者のセオドア・ホルム・ネルソン (Theodor Holm Nelson, 別名テッド・ネルソン) が 1960 年代、コンピュータとインターネットが出現したことによって生まれた、非線形性のインターアクティブ (相互作用的) な新しい読み方を定義する目的で考案したものである。ハイパーテキストの有名な例としては、インターネット上の文書群 [Web ページ] があり、文書 (テキスト) の基本的な部分に関する語群あるいはトピックスにしたがい、さまざまなリンクやハイパーテキストにアクセスすることによって、読者 (閲覧者) にさらに積極的な読み方の可能性を提供している。

世界の国ぐにの芸術や文学における詩学にはハイパーテキスト、あるいはオリジナル・テキスト=原文 (эх текст, эш бичвэр / original text) という概念がある。これについて、[モンゴル国立教育大学の] S.エンフバヤル教授は、「いずれの国家にも、当該の国民や領域の文化の根源と無尽蔵の源泉であり、精神の基盤と神聖な揺籃にもなった文書群 (テキスト) が存在する。ポストモダニズムではそれらをハイパーテキストという公式化の下で取り上げる」(S.エンフバヤル『文学理論』、ウランバートル、2011 年、274 頁) と述べ、西洋の文化、文明、精神の根源が聖書にあり、東西の古典的な芸術や文学を聖書の思想抜きにして想像したり理解したりすることはできないと解説している。その一方で、G.バトソーリ博士は「繁茂した木」という評論の中で、「モンゴルの民族文化の特殊な過渡期であり、多様な民族文化の衝突とグローバリゼーションのこの時代に、他の諸民族と区別されて残る本質的なものは、ひとえに私たちのハイパーテキスト群の中に、すなわち『モンゴル秘史』『ゲセル物語』『ジャングル物語』、そして古来の英雄叙事詩や神話体系のような芸術作品群の相互関係の中に見つけ出すことができる」(G.バトソーリ「繁茂した木」『文学に関する話』、ウランバートル、2017 年、182 頁) と結論づけている。私たちはこれらの研究者と同一見解であるだけでなく、彼らの解釈学に依拠しながら、新時代の物語 (хүүрнэл зохиол) の一つの表現様式がハイパーテキストにほかならないことを、以下の作家たちの作品を通して証明することを旨とした。

新世紀が明けて 20 年あまりが経過したものの、この期間がかなり短いように感じられるのは、人類にとって最高速度で年月が経過していたからであり、それは電子的な世界が即座に提示してくれる。近年、G.アヨールザナの『最期の息を引き取る鳥の翼』(2006 年)、『シ

ユグデン』(2012年)、『白と黒と赤』(2014年)、B.バトレグゼドマーの『執^{しゆ}金剛^{こんごうじん}神』(2014年)、G.メンドオーヨーの『聖人』(2012年)、N.ナガンボーの『黄金の天空』(2014年)、Ts.ボヤンザヤーの『ルリタマアザミ(瑠璃玉薊)』(2016年)、『夢の中の夢』(2008年)、Ts.ツェンドの『四ツ目の夢』(2002年) ...といったような多くの作品が現れた。これらの作品の物語(өгүүлэмж/narrative)は、そのすべてが神話であり、モンゴル文学の三大高峰の一つ『モンゴル秘史』や多くの伝典の断片をモザイク状にはめ込み、作品の筋(үйл явдал/plot)に興味、葛藤、紛糾を加えて、読者の関心を引くレベルに達するよう芸術的に創作されたものである。これはハイパーテキストを主要な芸術技法にした表徴にほかならない。